



No.57  
2004年3月発行

## 新潟県支部報

マイ スコープ

### 寺泊探鳥会に参加して

五泉野鳥の会 寺田友次

平成16年2月1日、終日絶好の冬日和に恵まれ、私達五泉野鳥の会のメンバー17名は厳冬の「日本海海鳥を訪ねる会」に参加した。

何分、私達全員ビギナーで、関係各位はじめ皆様に大変お世話になり、楽しく意義ある探鳥であった。このことがそれぞれの話題となり、帰途の車中も賑やかであった。

さて、この度の会は好天過ぎて、期待通りに姿を見せてくれるか心配されたが、最終的には出現数32種で、まあまあの結果だったと思う。ことにカイツブリとウの類は豊富で、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリなど。そしてウミウ、カワウ、ヒメウ（初めて出合って感激）。

コースは寺泊文化センターを起点に出雲崎港までで、途中海岸数ヶ所に立寄って観察した。テトラポッドや堤防のあるところでは例外なくセグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、ウミウが多数見られた。私達には懇切丁寧に教えて下さった伊藤両先生にお礼申

し上げたい。

圧巻はヒシクイの大群（67羽とか）が海上の空高く飛ぶ様で、北へ向けて翔び去った。いつもより早い北帰は地球温暖化の影響かと複雑な別れであった。目をひいたのはイソヒヨドリの美しさ。日当たりに背中のブルーが素晴らしい。ゆっくりと旋回中のノスリが1羽、急降下して忽ち視界から消え去った素早さ。

カンムリカイツブリの潜水時間の長さ、数えた人が40秒と言う。ヒメウの華奢なつやつやの黒など、話題が一杯であった。

約2時間の観察会であったが、みんなが楽しく学んだことを喜んだ。その上、昼食のタラ汁の旨さは格別で、3杯のおかわりが出て寺泊ならではのイベントであった。

私達は研修会終了後、寺泊魚市場でショッピングを楽しみ、さらに弥彦神社を参拝して、一日の旅が終了した。一同を代表し、皆様のご厚意にあらためて感謝いたします。

ヒシクイの北帰行

# タカの渡り・山本山の11年間

～サシバとハチクマを中心に～

佐和田町 末崎 朗

## はじめに

タカの渡りは古くから愛知県の伊良湖岬が有名であったが、新潟県でも同様にタカの渡りが見られるということが知られるようになったのは比較的近年のことのようである。私は1980年代後半に上越市の古川弘氏に牧村の牧峠でタカの渡りが見られることを教えてもらい、これなら県内の他の場所でもタカの渡りが見られるはずと思い、情報を集めていた。その結果、小千谷市の山本山が非常に観察に適していることがわかり、1993年からここで観察を始めた。何回かこの支部報の紙面を借りて報告してはきたが、観察を始めてからはや11年が経過し、そろそろまとめて報告しなければと思いながら時間が過ぎ、今日に至ってしまった。遅ればせながら観察数が多いサシバとハチクマについて報告させてもらおうと思う。この観察結果は私だけではなく、主に中山正則氏と篠田正則氏のデータによっている。また、近年は他県でも観察が進み、タカの渡りについて色々なことがわかつってきた。それらとの比較も行ってみようと思う。

## 観察結果について

表1と表2にこの11年間の山本山でのサシバとハチクマの観察数を月日ごとに示した。この2種の渡りは9月初旬から10月まで見られるが、9月初旬と10月の中旬以後に観察した日は少なかった。敬老の日の9月15日から9月末までの間に渡りのピークのあることがこの表から読み取れる。観察を始めた1993年から1996年頃までは、渡りのピーク時でも休日しか観察できず、観察総数も年によりまちまちであった。しかし、1997年、1999年、2001年、2002年は観察日数も多くなり、サシバはだいたい1,000羽以上、ハチクマは400羽以上が山本山を通過するらしいことがわかつってきた。

山本山におけるこの結果を大規模なタカの渡りが観察される長野県白樺峠のデータと比較してみたい。2001年度に白樺峠で観察されたサシバは11,966羽、ハチクマは2,101羽とのことなので、サシバの数でいえば山本山のほぼ10倍であるが、ハチクマでは5倍程度にすぎない。山本山では、ハチクマの割合が高いと考えられる。ちなみに白樺峠より南にある愛知県の伊良湖岬ではよりハチクマの割合が少なくなるそうである。

山本山では同じコースを渡っているように見える2種であるが、沖縄を経由してフィリピンまで渡ると考えられるサシバと、九州の長崎県五島列島から中国を経由して東南アジアをさらに南下すると考えられるハチクマでは日本国内でも渡りのルートが微妙に異なっているのかもしれない。さらに、ハチクマについて成鳥と幼鳥の識別が可能なデータを整理した結果、白樺峠では幼鳥の割合が46%、伊良湖岬では94%だったという。この割合は年による変化はほとんどないとのことである。山本山では、今まで成鳥、幼鳥の識別をした調査を行っていないが、私が見てきた中では幼鳥の割合は10%以下ではないかと思われる。今後ハチクマの渡りを調査する上で、成鳥と幼鳥の識別はぜひ行わなければならない課題と考えている。

次に表1のデータをもとに調査期間を5日ごとに区切り、集計結果を図1に示した。山本山のサシバについては9月16日から9月20日までの5日間にピークがあり、9月末まで徐々に減り、10月になると急激に少なくなる。それに対し、ハチクマの数は9月16日から5日間はまだピークにならず、9月21日から9月末までの間にピークをむかえ、10月になってからの減り方もサシバよりもぶい傾向がある。山本山でのサシバとハチクマの渡りは共



に9月下旬にピークがあると言えるが、両種には若干ずれがあり、ハチクマの方が少し遅い傾向がある。一方、白樺峠で1993年から2001年のデータを集計した調査結果によると、サシバは9月16日から9月20日までの5日間にはあまり見られず、9月21日から9月25日の間に最大のピークをむかえ、9月末までにほとんどが渡っている。また、ハチクマは9月16日から9月20日の5日間にその数はピークに達し、9月21日から9月25日の間もほとんどその数は減らず、10月の初めにかけて徐々に減っていくというパターンである。白樺峠ではむしろサシバよりハチクマの方が時期的に早い傾向があると言える。サシバやハチクマの渡りの速度は、電波発信器を用いた調査などより、時速30~60kmと考えられており、もし山本山を通過した個体が白樺峠も通過するとしたら1日か2日のうちに飛んでしまえる距離である。この渡りのピークの傾向から推定すると、ハチクマの方がサシバより渡る速度が速く、新潟から長野に渡る際にサシバを抜いてしまうのではないかとも推測できる。このことを確かめるには山本山と長野県の間を埋める地点でのより詳しい調査が必要である。

渡りの見られる時間帯については、データ数が多いこともあり、山本山のデータをまとめきれていないが、今までの観察から山本山では明らかに午前9時~11時の間に渡りのピークがあり、午後からはめっきり数が減る傾向がある。この傾向は新潟県内の山本山以外の調査地点でも報告されている。これに対し、白樺峠では正午から午後の早い時間帯にピークが来ることが明かになっている。山本山の標高は336mで、県内の他の調査地も1,000m級の牧峠を除き、その標高は200~500m級である。しかし、白樺峠は標高1600mで、そこから先に北アルプス越えを控えている。移動中のタカは、これから渡ろうとするルートの状況をわかっていて、時間帯や速度を変えていのではないかという予想もできる。

## タカの渡り調査の今後の課題

### ①識別力の向上

白樺峠における調査は、2ヶ月間休みなく調査を続けることで多くの人々が調査に参加し、できうる範囲で細かい点も記録するような体制ができている。成鳥と幼鳥、ハチクマの変異型（暗色型、中間型、白色型）、雌雄などの違いを可能な限り全て記録している。山本山での調査はこのような詳しい記録を取つてこなかった。調査期間についても9月中旬から下旬までを休みなく観察するのがせいいっぽいで、白樺峠と同じような体制をとるのは難しかった。少なくとも識別については渡りの解明に向けてできるだけ細かくすることが必要であると感じている。そして、なによりも一番ショックだったのは、ハイタカとツミの識別ができていなかったことである。先日、野鳥写真家の叶内拓也さんが山本山に来られて、今までハイタカとしてきた小型タカがほとんどツミであるらしいとわかり、探鳥会等の際に間違って教えた方々に大変申し訳なく思っている。他県との交流も広くはかり、常に勉強していく姿勢が必要を感じている。

### ②山本山以外の調査地について

新潟県では、長野県、岐阜県、愛知県さらにはそこを通過した後に通る西日本の各県などのように1シーズン1万羽を超えるような大規模な渡りは現在まで知られていない。しかし、山本山以外にも中条町櫛形山、長岡市南蛮山、柏崎市小村峠、牧村牧峠、妙高高原町池ノ平など1日に100羽を越えるタカの渡りが見られる場所が数多くある。これに対して、他県では大規模な渡りが見られる主要なルートをはずれるとあまり渡りが見られないという話を聞く。これは、新潟県においてはサシバとハチクマの繁殖数が比較的多いのではないかということ、北東から南西方向に連なる山なみが多く、タカの渡る方向と一致するため観察しやすいことなどの理由が考えられる。観察地点が多いということは、反対に観察する人の数が多くないと全てを見ることは難し

いということである。これらの調査地点の中で、山本山は山頂まで車で到達でき、高速道路やインターチェンジへのアクセスもよく、見通しのきく展望台があるなどさまざまな条件に恵まれ、近年は関東地方からも人が訪れるようになっている。そのためサシバとハチクマの渡りの時期に関してはようやく連続して観察できる体制ができつつあるように思う。しかし、他の観察地点も連続した観察ができないと新潟県でのタカの渡りの解明はなかなか進まないであろう。特に現在新潟県で最も

多くの数の渡りが見られるという妙高高原町での調査が進まないと、長野県との関連性など多くのことがわからないままである。せっかくできつつある山本山での体制を維持しながら、他地点での連続した観察体制をいかに築くかが、これから的新潟県で最も急がれる課題ではないかと考えている。

(注)白樺峠のデータは全て「タカの渡り観察ガイドブック」信州ワシタカ類渡り調査研究グループ著(文一総合出版)によった。

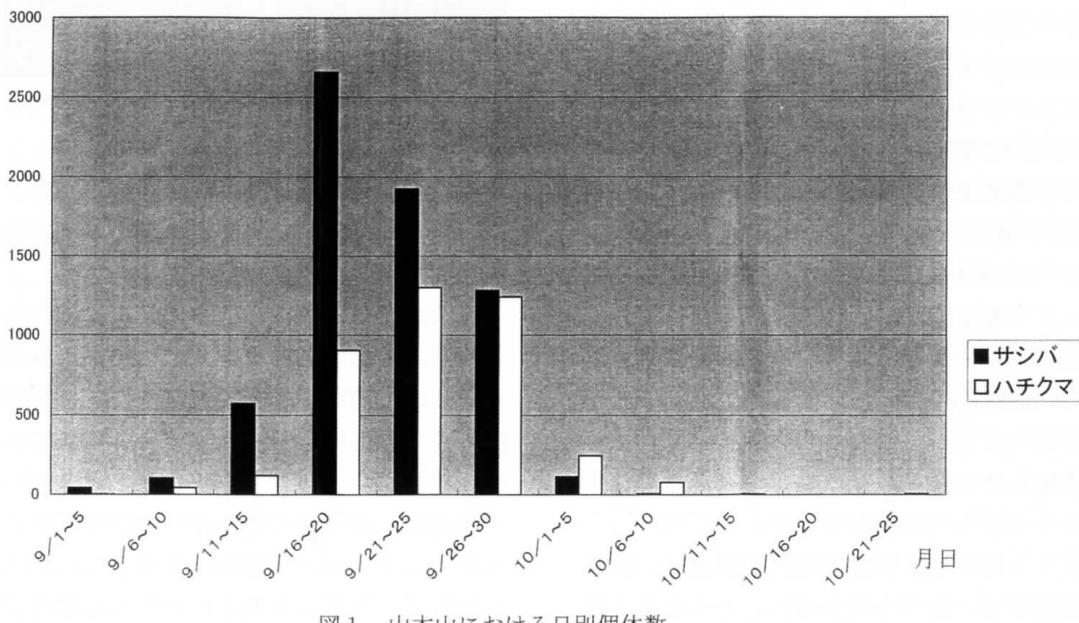


図1. 山本山における日別個体数

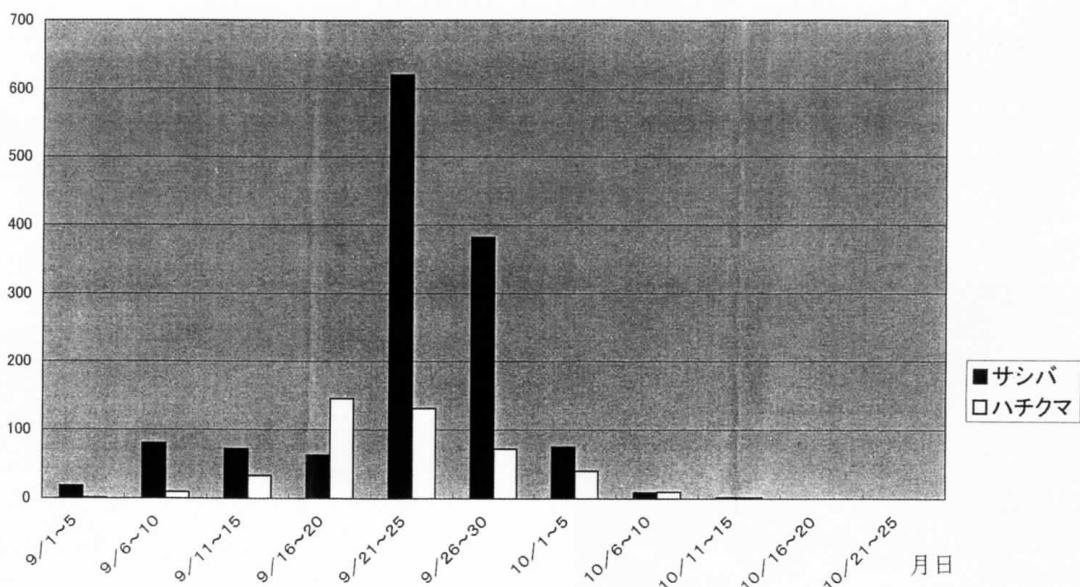


図2. 白樺峠における日別平均個体数

# 12,000分の1

新潟市 伊藤定市

かねてから一度は行ってみたいと思っていた鹿児島県の出水に行ってきました。

冬季、越冬のために集まっているツルは、近年は例年10,000羽を超え、今年の1月6日の記録ではナベヅル8,520、マナヅル2,942、クロヅル7、カナダヅル3、ソデグロヅル1、アネハヅル0、ナベグロヅル4、合計11,477と出水駅の案内板に掲示されていました。そして私が帰った後の1月20日過ぎの新聞で、今年12,000羽を超えるツルが越冬し、早くも北帰行が始まったと報じられていました。

出水へのコースですが、私は新潟空港から福岡空港へ飛び、博多駅からJRで出水駅までというものでした。

交通費は、航空機代は誕生日割引きで片道1万円、JRはジパングで3割引きということで、思い切って行く気になったのです。

手続きは一切旅行社任せでホテルもビジネスホテル並みで世話をもらいました。

さて1月8日は10:10新潟空港発JAS。朝方の吹雪で早い便の出発が遅れ、どうなることかと少し心配しましたが、私の乗る便には影響は少なく25分遅れで出発できました。

飛行機を利用したり、乗り継ぎがある旅は時間に余裕をもった計画が大切ですね。

福岡までは雲ばかりの眺めでしたが富士山はやっぱり日本一の山、ちゃんと雲の上に頭を出していました。1時間45分で福岡空港。



中央クロヅル 他ナベヅル 2004.1.9



マナヅル 2004.1.9

福岡空港からは地下鉄で5分で博多に着き、JR特急「つばめ」で約2時間30分で出水です。車中で弁当を食べました。

私の泊まるホテルは出水駅のすぐ前にありました。ウイング・インターナショナル出水というのですが、まあ新潟駅前の東急イン程度の感じでした。ゆっくり旅装を解いてからツル観察地点までの地理や交通を調べました。

現地は薄曇りから晴れの穏やかな天候で、元日に引き始めた風邪が治り切っていないにも拘らず、無事に2泊3日を楽しんで過ごせたのは幸いでした。

出水は不知火海に面し、温泉が豊富です。ツルの越冬地ということを観光の目玉にし、鶴の名を付けたホテルも複数あり、鹿児島空港からシャトルバスが1日16本運行されています。90分、1,600円でした。

ツル飛来地は海を埋め立てた干拓農地で、観察センターは西干拓地にあって出水駅から14km。200円でいける市内バスがありますが1日2~3本しかなく不便です。駅前・ツル博物館・観光センター・武家屋敷を巡回する観光バスが9:50~14:20の間1時間毎にあって観光センターまでを片道として400円です。ちなみにタクシーは3,000円とのことでした。

観察センター周辺には民宿もあり、土産物屋もたくさん出ていました。

観察センターには食堂もあり、210円で上がる二階には望遠鏡も設置され、眼下に広がる給餌場（フェンスで仕切られている）の内外に密集しているツルを見ながら、スピーカーから繰り返して流れてくる解説を聞くことができます。

観察センターの外に出てフェンス越しに見ながら歩きました。私のねらいの第一はツルの種類を確認することです。ナベヅルは新潟でも見ています。マナヅルは新潟に来た時は見る機会を失ったままでした。ここにはこの2種はわんさかいますので、先ずこの2種をしっかり観察した後、案内板にあった他のツルを探しました。クロヅルをやっと1羽見つけてなんとかカメラにおさめましたが、その日はそれ以上見つからず、帰りのバスになりました。その帰途、バスの運転手が「いましたよ、12,000分の1が」と教えてくれました。

12,000分の1、それはソデグロヅルです。その日、午前中から探して、かなり近くまで歩いたのでしたが、60倍の望遠鏡でも見つからず諦めていましたから嬉しさは格別でした。

バスを止めてもらって窓越しに確認し、カメラのシャッターを切りましたが、暗さと振動でものになりませんでした。



ソデグロヅル 2004.1.10

翌日、午前中に再びバスに乗り、前日に見たあたりで降ろしてもらい、付近を探しましたら、見つかりました。他のツルと異なり地上での立ち姿は真っ白ですから見つけやすいのです。明るい光線のもとで何枚かの写真を撮るうち、お逃げに飛び立ってくれました。

ソデグロヅルはその名前のとおり翼の先(初列風切り)が黒いので種の確認に役立ちます。急いでシャッターを切ったのは勿論です。

はるばる単独で出水まで来た甲斐があったと、こみあげる嬉しさを迎えきれず、頬がゆるみっぱなしでした。12,000分の1が観察できた。それが今年（78歳）の誕生祝いであったのだと思って喜んでいます。



左ソデグロヅル 右ナベヅル 2004.1.10

# 続・どくとるアルバトロス航海記

新潟市 高辻 洋

## 鳥も通わぬ日本海

新潟から北海道へは、小樽へ行く航路と苫小牧へ行く航路があります。それに私はまだ乗ったことがありませんが、直江津から室蘭へ行く航路もあります。私は小樽へ1回と苫小牧へ3回乗りましたが、結果は全部ハズレでした。4月から5月にかけてという渡りの最盛期に乗ったのですが、それでもハズレでした。少なくとも船が津軽海峡に入るまではダメでした。両航路とも18時間ほどの航海ですが、終日海を見ていて出たのはオオミズナギドリ2、3羽とボチヨンと浮いてきたアビヒウだけといった状態ばかりでした。鳥海山という「鳥の海」を名乗る山の麓を航行しているのに、これは一体どうしたことでしょう。シギ、チドリと同じように、日本海は海鳥の渡りのルートからはずれているのでしょうか。

私は00年5月に、能登半島の輪島と舳倉島を結ぶ航路の中間にある七ツ島の周辺で数万羽のミズナギドリの群れを見たことがあります、日本海で太平洋級の大群を見たのはこのときだけです。七ツ島はオオミズナギドリの集団繁殖地で、4万羽が繁殖しているそうですから、私が見たのはここで繁殖している群れだったのでしょう。粟島もオオミズナギドリの繁殖地で、およそ1万羽が繁殖するといわれていますが、私は80年の5月に粟島で、日没と同時に外海から島へ戻るオオミズナギドリの群れのあまりの数の多さに呆然となったことがあります。

日本海では、こうした限られた繁殖地の近くではそれなりの群れに出会うことはあっても、太平洋のように多くの海鳥が大挙し

て渡って行くということはないようです。ただ、佐渡航路でコアホウドリを見たという話がありますし、私も3月の佐渡の姫崎灯台付近でウミスズメの群れを見たりしているので、日本海の航路は「当たったらおなぐさみ」というつもりで乗るのが正解のようです。

私が、あまり鳥が出ないにもかかわらず何回も日本海航路に乗っているのは、陸路で大洗へ行くよりも始めから船で北海道へ渡ったほうが交通費が安上がりだという経済的事情がもっぱらなのですが、やはり「当たったらおなぐさみ」に期待する気持ちもあるし、津軽海峡に入ればそこそこ鳥は出るからでもあります。実際、船が津軽海峡に入ると次第に鳥は多くなってきて、苫小牧に近づくにつれて鳥の数も種類も増えてくるのですが、そのころはすでに太平洋にさしかかっているわけですから、鳥が多くなるのも当然といえば当然かも知れません。

## 絶海の孤島、鳥島

アホウドリを見る機会は思いがけず簡単にやってきました。一昨年（02年）3月8日、「豪華客船“ふじ丸”で行く鳥島アホウドリウォッチングクルーズ」というツアーに乗ったからです。

私たちがもし県内だけで鳥を見ているとすると、普通に見られるのはせいぜい200種とちょっとが限度でしょう。ですからより多くの鳥を見ようとなれば県外へ出掛けて行くことになりますが、そうするとお金がかかります。そこで、遠征先で初めての鳥を見ると「1羽10万円」などと苦笑して言うことになるのですが、私の場合アホウドリは1羽10万円でした。横浜港からの船



「鳥島 中央斜面がアホウドリの営巣地」

代が8万円と横浜までの交通費が2万円です。なぜ横浜から鳥島まで行ってくるのに8万円もかかるかというと、ふじ丸は世界一周クルーズをする豪華客船です。横浜港から鳥島へ行ってくる航海の時間は39時間ほどですが、金曜日の夕方出航して日曜日の昼前に戻ってくるため、夜が2回あります。この2晩ともディナーを食べるのです。豪華客船ですから朝食も昼食もそこそこのものが出ます。要するにおいしいものを食べて船旅を楽しもうという人たちのための航海ですから、高くて当たり前というわけです。ですからこのツアーの船客は、船旅を楽しむ上流社会の人たちと鳥を楽しむ下流社会の人たちに二極分化されていて、8万円という一番安い切符を買った私は、着飾って「そーざますか」などと言う昔若かった女性と同じテーブルでディナーを食べるようなことになってしまったのです。私は「メシはラーメンライスでいいから3万円くらいで連れていけ」と思っていたのですが、世の中うまくいかないものです。

さて、東京から南へ600キロ、半日余りの航海の末にたどり着いた鳥島は絶海の孤島でした。周囲を荒波の打ちつける岩礁と絶壁に囲まれて接岸できるような場所はどこにもなく、絶壁の上は急傾斜の砂礫地や草地となっていて、平地も樹木も見えず、鳥さえも暮らせないのでないかと思うほど



「“ふじ丸”の甲板からアホウドリを観察する乗船客」

の荒涼たる無人島でした。鳥島に着くと船は極端に速度を落として、ゆっくりと島の周りを時計とは逆回りに回り始めました。船には山階鳥類研究所の佐藤文雄さんが乗り込んでいて、佐藤さんは航海の途中でも船内のホールで鳥島やアホウドリのレクをしていたのですが、船が鳥島を一周する間、ブリッヂのマイクで眼前の島の様子やアホウドリのことを詳しく解説していました。

最初に現れた傾斜のゆるい斜面に荒れた公営住宅のような建物が見えました。場所は初寝崎というところで、建物は昔の測候所を今はアホウドリの調査の基地として使っているのだそうです。その少し上の方に、現在の繁殖場所があまりにも傾斜が急で条件が悪いので、そこからアホウドリを移転させようと誘引を試みている場所が見えました。船が進むと島は次第に絶壁に囲まるようになりますが、その絶壁の中ほどの急傾斜地がアホウドリの繁殖場所だと聞いたときは、にわかには信じがたい思いがしました。なぜならば、そこは産んだ卵がコロコロと転がって海に落ちてしまうのではないかというほどの急傾斜地で、雨が降れば土砂が流れるだろうし、よほどの機械力でもなければ土留めの工事などしてみようがないような場所だったからです。どうして選りに選ってこんな場所に営巣するのかと言いたくなるような、そんな急斜面のあ



「鳥島の南80キロの太平洋にろうそくのように突き出た“嬸婦（そうふ）岩”」

ちこちに白い点が見えましたが、それが抱卵しているアホウドリでした。

アホウドリは絶壁をバックにゆっくりと飛んだり、小さな群れで海面に浮かんだりしていましたが、船がゆっくりと進んでいるせいか、海面で休んでいる群れは船が近づいても飛び立つでもなく、甲板から見下ろす船のすぐ脇をゆっくりと船尾の方へと流れていきました。アホウドリは成鳥、幼鳥が入り乱れていましたが、いずれも図鑑で見るとおりで、特に白い十字模様を背に淡橙色の頭をした完全な成鳥が目の前を飛ぶときなどは、船上から一斉に歓声が上がっていました。群れにはクロアシアホウドリもかなり混じっていて、アホウドリよりもさらに船に近づいて、手の届くほどの高さで船を飛び越えるような大サービスも見せてくれました。

船は周囲8キロの鳥島を2時間かけてゆっくりと2周しました。船の島側の甲板はたくさんの下流社会の人たちが望遠鏡や超望遠レンズを並べて熱心に観察をしていましたが、上流社会の人たちはかのアホウドリ

さえも一瞥すればこと足りるらしく、「あら、あれがアホウドリなの、わたし寒いわ」などと言って船室へ戻る人が多かったようです。

アホウドリがなぜ激減したのか、そして現在どのような復元作業が続けられているのかは広く知られていますが、こうしたこと抜きにしても実際に絶壁に営巣するアホウドリを目の当たりにすると、トキを引き合いに出すまでもなく、種を維持、存在することの厳しさということに思いを致さざるを得ませんでした。

3月の初めというこの時季はアホウドリの観察には最適ですが、海鳥の渡りにはまだ早すぎたようで、帰路の浦賀水道あたりでわずかにコアホウドリとオオミズナギドリを見た以外は、鳥島を往復する海上ではただの一羽も鳥の姿を見ませんでした。

鳥島はこの半年後に噴火したということですが、心配されたアホウドリの営巣地への被害はなく、その後の繁殖も順調だったのは何よりでした。（続く）

# タカの渡り探鳥会報告

(小千谷市山本山)

編集部

## 全県探鳥会（9月15日）

前日の晴れという天気予報にもかかわらず、9月15日の山本山は小雨。私が少し遅れて山本山に着いた時にも、まだ山頂の展望台は霧というよりは雲に覆われていて、近隣の山はおろか眼下に見下ろせるはずの信濃川も見えない状態でした。例年この季節の予測しにくい天気とはいえ、期待していた分だけ「何とかしてくれよ天気予報」というのが肌寒い中ずっと待ち続けるタカの渡りファン達のいつわらざる気持ちであったと思います。特に近頃は、口コミで話を聞いた群馬や埼玉、東京など関東地方の方々が朝早くから車を飛ばしてやって来ても、関東との天気の違いにがっくりするというケースが多く、かわいそうな気がします。

参加人数 28名

観察した種類と個体数

サシバ（10）、オオタカ（1）、ノスリ（2）、ハチクマ（2）、ミサゴ（2）、ツミ（3）、ハヤブサ（1）

## 中越地区探鳥会（9月23日）

9月15日とはうってかわってこの日は朝か



ハチクマ（金子秀樹氏撮影）

ら快晴。前日の22日も晴れましたが、気温があまり上がらなかったせいか、サシバ39、ハチクマ4、ノスリ2、ツミ3、チゴハヤブサ1と渡りの最盛期のわりにはあまり多くなく、この探鳥会の日への期待は膨らむ一方でした。8時22分に展望台の東側からサシバ、ハチクマが円を描きながら上昇し始めると10時30分頃までは、ほぼ途切れることなくタカの渡りが見られました。

また、この日は図鑑も多く執筆されている写真家の叶内拓也さんが9時頃から来られて、参加者一同色々と教えていただきました。その一番の点は、この時期に渡る小型のタカは、ほぼ90%はツミであろうとのことでした。これは探鳥会の幹事もよく判っていないまま大きさの見た目でハイタカにしていたのですが、図鑑に記述のある通り、ツミの雌とハイタカの雄は大きさに差がなく、大きさだけで識別するのは困難であり、胴と尾の長さの比率やツミは尾翼の中央が少しへこむように見えることから識別しなければならないそうです。ハイタカの渡りは他県の観察地でも10月中旬頃から多く見られるようになるそうで、大変勉強になりました。

参加人数 34名

観察した種類と個体数

サシバ（30）、ハチクマ（108）、ツミ（24）、不明小型タカ（1）、ノスリ（3）、チョウゲンボウ（1）、ミサゴ（1）



山本山における観察風景

## 新潟県支部研究発表会

# 「雪国新潟の野鳥を訪ねて」をきいて

西蒲原郡吉田町 鈴木初江

この会の案内をもらってすぐ、聞きにいこうと決めた。「角田山でみられる鳥について」に目が止ったからだ。角田山は、何回か登っている。いつも越後線の車窓からながめている暮らしの中の山だ。ぜひ、聞きたい。加えて、ビデオ・スライドによる研究発表ーという文字が後押ししてくれた。

11月2日、県立自然科学館へ。広い会場には、役員や発表者を除けば、何人もいない。なんだか場違いの所に来たような恥ずかしさだったが、発表が始まるとそんな気分は、いっぺんに忘れてしまった。

小池重人氏の「長期的な気候変動における生物への影響—コムクドリや桜の開花について」は、25年にわたる地道な調査に脱帽した。地球温暖化とのかかわりを見極めようと、ソメイヨシノの開花とコムクドリの初卵日を丹念に調査したもの。ソメイヨシノは、25年間で、9日早くなっているという。コムクドリは、同じく25年間で18日早く初めての卵を産んでいるとか。

一枚の図表にちらばった観測点の中から慎重に結論を導き出していて、科学する態度を教えてもらった。

そして、この温暖化によるとみられる生物への影響が、地球規模でどのように進んでいるか、気にかかるところだ。

二番目の発表は、いよいよ目当ての角田山の鳥だ。細山昇氏は、三年間の調査をスライドをふんだんに使って話してくれた。

年間百回も登ったというだけあって、コース別、季節別にたくさんの鳥と出会っている。

鳥の姿・表情は豊かで、すっかり楽しませてもらった。鳥との出会いは、なにより回数多くでかけることか。来春は角田山へも足をのばしたい。それにしても、予想以上の種類の多さ（91種）に嬉しくなった。

最後は、岡田成弘氏の「鳥屋野潟で確認されたカンムリカツブリの幼鳥、及び鳥屋野潟南部の水田で繁殖したケリについて」だった。どちらも、新潟での繁殖は例のないこととか。支部報56号に一部報告されている。ケリは分水町にいるというので、何回か出かけたが、私はまだ見ていない。

身近な野鳥の観察から環境の変化を読み取る大切さを学んだ。

こんないい発表を、もっとたくさんの人と聞きたかった。難しい発表ではないかと感じている人がいたら、それは思い違い。内容は確かに深く難しいものかもしれないが、発表者はビデオやスライドを駆使して、とても分かりやすくおもしろい。映し出される鳥たちの様々な姿は、とても魅力的だ。

今回の発表を刺激にして、  
また、外へとび出して行こう  
と思う。



発 行 2004年3月30日 No.57

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎朗、千葉晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 ☎950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉 00610-1-6002